総合型選抜　2025 年度過去問題　建築デザイン学科

2025 年大阪・関西万博のメイン会場を設計する建築家のインタビュー記事である次の文を読んで、あとの問いに答えなさい。

『万博の理想像、答え出す　「大催事場」設計　伊東豊雄さん』

ずるずると工事が遅れ、迷走する 2025 年大阪・関西万博。メイン会場の設計を手がける建築家の伊東豊雄さん（当時 82）がインタビューに応じ、「現場の今」を語った。「かなり混沌（こんとん）としています。本来なら着工していないといけない時期ですが、３度にわたる入札とコスト調整などに時間を費やしています」

伊東さんが設計を託されたのは、開会式など大きなセレモニーを催す「大催事場」。2000 席を擁する円形劇場にする構想で、会期中はコンサートや歌劇、歌舞伎などのイベントが次々に催される。話題をさらうような斬新なデザインと構造で、万博の魅力を内外に発信することを期待されている。

しかし伊東さんが当初、設計者の選定の際に提案した建築の根幹ともいえる内部デザインには待ったがかかった。また、建設費の高騰などから建物のシンボルである大屋根の上に人々が集える広場を作るという案も計画の見直しを迫られた。

「管理のしやすさだとか、コストの問題だとか、そういうことばかりで、何ら①本質的な議論がなされないのは、この万博に限ったことではありません」。伊東さんはそう振り返り、すぐに「でも」と言葉を継いだ。「そういうことに対する反発から気持ちが燃えてくる、ということはあります」。その後、新たに提示した内部のデザイン案は決して変更しないつもりだ。新たなデザイン案は近く公表される見込みだという。

大催事場の工事の入札は３回重ねて 2023 年 5 月、ようやく落札者が決まった。約 48 億円で始まった落札の予定価格は建築資材急騰の波をもろにかぶり、落札時には約 1.5 倍の約 71 億円に膨らんだ。

しかし、工事はまだ始まっていない。「開幕に合わせてできるだけ複雑なことはやめ、単純化してコストを下げようとする総合建設業者と、私たちの主張とのせめぎ合いが続いています」

そして、実質的なクライアントである国や大阪府・市にこう注文した。「国や大阪府、大阪市が考えている万博はレジャーランドのようなアミューズメントパークではないでしょうか。万博を開催する意義、ビジョンを示すことができる強いリーダーが必要です」

◇失望した 1970 年

実は伊東さんにとって、万博に関わるのは今回が２度目になる。最初は 1970 年の大阪万博。芸術家、岡本太郎（1911～1996 年）がデザインした高さ約 70 メートルのシンボルタワー「太陽の塔」や、大企業が華やかさ、目新しさを競ったパビリオンなど、戦後日本の記憶に刻まれる一大イベントだった。

伊東さんは建築家、菊竹清訓（1928～2011 年）の事務所のスタッフとして目玉の「エキスポタワー」を設計した。万博で総指揮を執った建築家、丹下健三（1913～2005 年）のグループにも参加し、図面を引き、模型を作った。菊竹、丹下はともに建築界の巨人であり、駆け出しの建築家にとって仰ぎ見る人物だった。

その２人に師事した伊東さんだが、大阪万博の開幕を待たずに、事務所を辞めている。まだ 20 代後半だった。「丹下さんたちがどんな未来都市を描くのか、興味を持っていました。でも、科学技

術の進化こそが明るい未来を実現するというビジョンに違和感がありました。その最終形がこの大阪万博か、と思った瞬間、熱中できなくなってしまった」

そんな伊東さんが半世紀後、再び万博に参加するのはなぜか。それは、1970 年の大阪万博で建築家らが「理想」に掲げ、20 代の伊東さんが「失望」した未来都市の姿について、答えを見つけるためだという。

2021 年 10 月、同年に行われた東京オリンピック・パラリンピックについて「建築家としてどう受け止めるか」とインタビューした際、伊東さんは「建築物を含め、レガシー（遺産）が何も残らなかった。日本の文化的貧しさを痛感した」と答えた。メイン会場である新しい国立競技場の設計コンペで隈研吾さんのチームに敗れた経緯も考え合わせると、当時の批評はブーメランとして今回、自分自身にはね返ってくる可能性もある。

だが、伊東さんは言う。「プレッシャーは甘んじて受けます。やるからには、『いのち輝く未来社会のデザイン』というテーマに見合う痕跡を残したい」

◇「生命力与えたい」

1970 年の大阪万博で、岡本は、テーマ展示プロデューサーとして関わりながら、「太陽の塔」を打ち立て、万博が象徴する科学的進歩がもたらす「素朴な未来志向」にアンチテーゼを突きつけた。伊東さんは、そこに「いまの日本に忘れられているもの」を見る。

「丹下さんたちが、やりたいことをやりたいようにやった時代は遠くなりましたが、人々に生命力を与えるような建築を作りたい」。そう言って、大催事場のイメージを語った。

「太陽の塔に匹敵するくらい、②力強い建築を作りたいと思っています」

（出典：毎日新聞　2023 年 10 月 05 日　東京朝刊　6 頁　総合面。　ただし、文章の一部に変更を加えている）

問１　下線部①の「本質的な議論」とは、どのようなものでしょうか。本文の内容をふまえて、200 字以内で説明しなさい（字数には句読点を含む）。

問２　なぜ伊東豊雄さんは 1970 年の大阪万博に失望したのでしょうか。その理由について、本文の内容をふまえて、200 字以内で述べなさい（字数には句読点を含む）。

問３　伊東豊雄さんが言う、下線部②の「力強い建築」とは、どのようなものでしょうか。あなた自身の考えを 400 字以内で述べなさい（字数には句読点を含む）。